



埴輪列再現(芝山はにわ博物館提供)

「房総」千葉介常胤を生んだ地⑦

千葉というアイデンティティ

房総半島は広い。しかも起伏が穏やかで温暖だ。

日本列島に人が住み着いた約3万5千年前すでにこの半島を生活の舞台にしていた人々がいた。彼ら旧石器時代人は、我々と同じ新人に属し、石で槍やナイフを作り、野にけもの狩り、川に魚をとっていた。木の葉や野草も採集していたが、栽培の技術はまだ無かった。日本の旧石器時代は石器の形や種類、組み合わせから推測すると、シベリアの北方文化と関係があるようだ。当時、地球は氷河期で千葉県も現在の八ヶ岳山麓（ほぼ同じ気候や植相）であった。高層ヒルが建ち並ぶ千葉市も、かつては針葉樹の生い茂る森林だったといことになる。彼らの生活は関東ローム層、いわゆる赤土の中から発見され、その多くは河岸段丘や台地の縁、沼の周辺などに見晴らしがよく水のある場所が選ばれている。日本全体の人口が1万人に満たない頃の話である。

7回目は千葉介常胤につながる歴史のおさらいを、私の体験談も含めて話したいと思う。



多賀謙治 プロフィール

多賀歴史研究所代表・元玉川大学教育博物館研究員。フィールドワークを重視した歴史研究を続け、NHKをはじめとした歴史番組の時代考証、新聞への連載、講演会などの活動を行っている。玉川大学・学園に設置された「鎌倉時代の勉強しよう」は鎌倉時代のWEB学習ページとして国内最大のもので、学校教育に限らず鎌倉時代に興味ある人にとって役立っている。著書に「知るほど楽しい鎌倉時代」（理工図書）などがある。

貝塚が物語る 千葉という大都市

やがて、温暖化が進み、極地や高地の水河が溶け出して海面が上昇すると、今度は丸木船に乗って人々がやってきた。縄文時代の始まりである。日本における土器の製作は世界でも最古の部類にはいり、類似するものは朝鮮半島や沿海州からも発見されている。日本が島になろうとする1万2、3千年前の頃のことである。この時代を縄文時代草創期と呼び、県内からも多くの遺跡が発見されている。特に富里・芝山地域には擦糸文系土器群と呼ばれる独特の土器を製作した遺跡が多い。世界中から人々がやってくる成田空港の滑走路下には、土器を作り、狩りをし、森の恵みを受けて生活していた人々の営みがあったのだ。

塚地帯に成長した。県民なら誰でも知っている加曽利貝塚は、この時代の遺跡である。貝塚が多い理由は、貝が棲息する干潟や汽水域に恵まれていたからで、私も小学生の頃に浦安で潮干狩りをした思い出がある。貝塚から出土する大量の貝殻は集落の人達だけで食べていたのではなく、干貝に加工され、干魚や塩、それに海藻などと共に内陸部の産物と交換されたことを暗示している。新潟県糸魚川だけに産出するヒスイや、県外からもたらされた黒曜石の出土はその証でもある。

貝塚については想い出があつて、私が初めて人骨と対面したのは千葉の貝塚だった。高校2年生の冬、松戸市中峠貝塚でのことである。住居の床面を掘っていた時、貝層の下から小さな骨がコロコロと出てきた。気にせず掘り出していたのだが、踵とすねが出てきて「足の甲だ」と気が付いた。しばらくして骨盤が出てきたので女性であることが分かった。彼女は赤土の固まりを抱いて座っていた。感動はやがてやってきた。徐々に現れた前歯がピンク色に透き通っていたのだ。居合わせた誰もが、この女性を「美人だ」と思った瞬間だ。ところが、この美女の歯は4500年後の太陽の光にさらされ、数分後に石灰色に変色してしまつた。この出会いのお陰で私は人骨を見ても動じなくなつた上、貝塚が単なるゴミ捨て場ではないことを身をもって理解したのだ。

豊かさが育んだ 大豪族の力

やがて、水耕稲作の技術が千葉にも伝わり弥生時代

となった。もともと大きなエポックは同時代の延長ともいべき古墳時代に、東京湾岸部と内陸部に大規模な古墳群が出現したことである。その数は1万を超え

兵庫県につぐ国内第二位を誇り、前方後円墳に限れば御本家の奈良県を軽く抜いて第一位という多さである。一例を示そう。山武郡にある芝山古墳群は国造級の大豪族がこの地にいたことを表している。殿塚・姫塚から出土した埴輪は端正な顔立ちとしつかりとした造りが特徴だ。豊かな文化がこの地に育まれていた証でもある。読者も帽子を被つた髭の武人、馬具をつけた馬、ひざまずく人の埴輪を写真で見たことがあるだろう。副葬品の鉄剣や甲冑等の武器、轡や鞍などの馬具は被葬者が武人であったことを表している。だが、この人は開発者の面も持ち合わせていたはずで、時代に多く造られた鉄製農具は荒地を開墾し、水を引

き水田を広げていく強力な武器となった。こうして房総半島の各地で古代の開発は進んだ。これらの国々は、大和朝廷下の国として、やがて奈良・平安の律令制下におかれた。大豪族は郡司として国司の下に置かれたが、後に彼らの多くが武士化していった。これ以外に中央から来た役人（貴族）が土着し開墾農場主となり、これらもやがて武士化した。中でも高位の者は血統の優位性で他の豪族を次々と取り込み武士団を形成していくのだが、これが坂東における武門平氏や源氏の始まりである。千葉県もそうした地域の一方で、常胤や広常たちはある日突然に現れたのではなく、長い年月に

繰り返されてきた興亡の末に歴史の舞台へと上がってきたのである。

連載を書くにあたり、私は再び千葉の地を歩いてみた。千葉県はやはり広い。北と南では地形も異なり内陸と海岸部とは気候も異なる。歩いてみて気がつくことだが、どこも豊かだ。一見単調に見える丘陵地帯も起伏がたおやかで美しい。谷戸には瑞々しい川が流れて田を潤している。太古よ

り人が住みつき開墾されてきた理由がよく分かる。後に江戸前と呼ばれる湾岸には豊かな漁場が広がり、太平洋には黒潮流れる大漁場がある。当然のように土地や漁場をめぐる争いもあつた。連載の主人公千葉介常胤の四十年間にわたる辛苦はその一端でもある。古い歴史を持ち群雄が活躍していた土地「千葉」。歴史という時間の積み重ねの中で、彼らの生き様は現代に生きる私たちに大きな示唆を与えてくれた。なかでも千葉介常胤は武士政権の誕生に大きく貢献し、千葉というアイデンティティを最初に育んだ人として、忘れてはならない人なのである。

ともに歩み ともに創る 地域の未来

千葉信用金庫
千葉市中央区中央2丁目4番1号
TEL: 043-226-1111(大代表)
http://www.shinkin.co.jp/chibaskb/